

ウィークリー・ブレット・オブ・ライフ

(2026年1月19日(月)～25日(日))

岸和田聖書教会
牧師 栗原純人

今週は水曜まで民数記、木曜からは私たちの主題聖句が含まれているテサロニケ人への手紙第一。

1月19日(月)

今日の聖書日課：民数記 11：1～15

それで、モーセは主に言った。「なぜ、あなたはしもべを苦しめられるのですか。なぜ、あなたのご好意を受けられないのですか。なぜ、この民全体の重荷を私に負わせるのですか。」

民数記 11：11

「なぜ…、なぜ…、なぜ…」。モーセは嘆きます。荒野の旅の途中で、食べ物で繰り返し激しく不平を言う民。それに対して怒りを燃やす主。板挟みのモーセ。拳句の果てに彼は言いました。

「私をこのように扱われるのなら、お願いします。どうか私を殺してください。これ以上、私を悲惨な目にあわせないでください。」。モーセが感じたのは孤独。このような状況になると人は孤独を感じるのです。自分はひとりぼっちだと。

あなたは大丈夫ですか？心の深い所で、孤独を感じていませんか？
受けられたのです。

1月20日(火)

今日の聖書日課：民数記 11：16～35

主はモーセに言われた。「イスラエルの長老たちのうちから、民の長老で、あなたが民のつかさと認める者 70 人をわたしのために集めよ。そして、彼らを会見の天幕に連れて来て、そこであなたのそばに立たせよ。」

民数記 11：16

民の不平と主の怒りの中で孤独を感じ、死を願うモーセ。主はそんなモーセに「ひとりじゃないよ」と 70 人がいることを示されました。民の長老でつかさである 70 人。冒頭の聖句は、こう続きます。「わたしは降りて行って、そこであなたと語り、あなたの上にある霊から一部を取って彼らの上に置く。それで彼らも民の重荷をあなたとともに負い、あなたがたった一人で負うことはなくなる。」。モーセはこのように孤独感から、孤独から解放されたので。主がモーセの上にある霊から一部を取って、70 人の長老に、またエルダデとメダデという人にとどめるとモーセの従者であるヨシュアは二人をねたみますが、モーセはヨシュアに言いました。「あなたは私のためを思って、ねたみを起こしているのか。主の民がみな、預言者となり、主が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。」と言いました (29)。

大切なことは自分が用いられることではありません。主の民、みなが一つとなって主に用いられることなのです。

1月21日(水) 本日は祈祷会です。宣教の祈りを献げましょう。和歌山聖書のため、隣人のため。

今日の聖書日課：民数記 12：1～16

モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。

民数記 12：3

モーセをねたんだ人が二人。兄のアロンと姉のミリアム。モーセがクシュ人の女を妻としたことを見て彼らは言いました「主はただモーセとだけ話されたのか。われわれとも話されたのではない

か。」(2)。しかしモーセはこれに反論しません。聖書は冒頭の聖句。彼が地上のだれよりもまさって柔和であったと言います。反論したのはむしろ主でした。主は怒ったのです、モーセのために。主はミリアムをツアラアトで打たれました。モーセは姉のために祈りました。「神よ、どうか彼女をいやしてください。」(13)。

主が怒ったというのは、主がそれほどモーセを愛しておられたということ。神さまは柔和な人が好きなのです。神を恐れ、自分を忘れるほど神を愛する人を。

1月22日(木)

今日の聖書日課：I テサロニケ 1：1～10

私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。

I テサロニケ 1：2

今日から、テサロニケ人への手紙を読んでいます。テサロニケ教会は、パウロが開拓した教会。まだできて間もない教会。若い教会。冒頭の聖句を見てください。パウロがテサロニケの聖徒たち、教会を想う時、それは感謝の一言に尽きていました。なぜ？「私たちの父である神の前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」(3)。

苦しみの中でも、この感謝が、パウロのそしてテサロニケ教会の力でした。

1月23日(金)

今日の聖書日課：I テサロニケ 2：1～12

キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように、」

I テサロニケ 2：7

そして11節。「また、あなたがたが知っているとおりの、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがたひとりひとりに、ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。」(12)。パウロはテサロニケの聖徒たちに対して、幼子、母親、父親のようになりました。すべて主の働きのためでした。

1月24日(土)

今日の聖書日課：I テサロニケ 2：13～20

「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いただいでしょうか。あなたがたではありませんか。」

I テサロニケ 2：19

この手紙は再臨を強く意識して書かれています。主が再び来られるときの喜びをパウロは想い描きます。そしてその喜びとはもちろん主イエスにあります。しかし同時にその喜びは主を信じて従い続けたテサロニケの聖徒たちにありました。

今も再臨を待ち望むあなたの喜びが教会に、兄弟姉妹にあります。

1月25日(日) CS合同歓迎礼拝

今日の礼拝説教箇所：マルコ 2：1～12

「神さまが喜ばれる信仰」

神さまが喜ばれる信仰って、どんな信仰でしょうか？

子どもたちとともに考えましょう。